

(明科町の埋蔵文化財12集)

長野県東筑摩郡明科町

W A D E Y A S H I K I

上手屋敷遺跡第2次調査

—町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書—

2004.3

明科町教育委員会



調査区全景（北から）



SK85半掘と調査区東断面（西から）



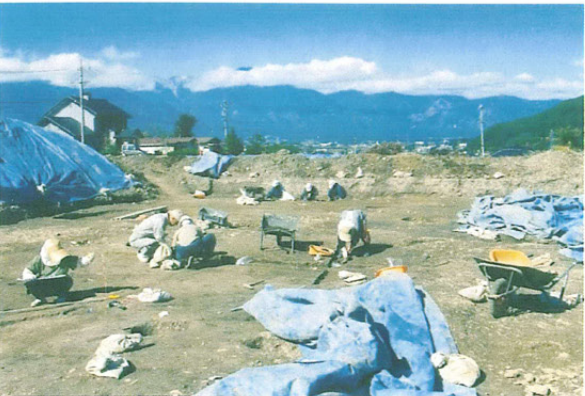
SK85半掘（西から）



SK85半掘 柱痕検出（南から）



調査区南東端（土坑群）



調査風景（東から）



明南小学生への現地説明会（西から）

写真1 現場の様子

序

上手屋敷遺跡は、中世における明科地域を支配した塔原氏の居館跡として知られている場所で、埋蔵文化財の発掘調査は今回で2回目となります。平成元年の明南小学校改築の際に行われた1次調査では縄文時代前期および奈良時代の集落跡が見つかっていません。このたび町では当地に町営住宅建設事業を計画したため、これに先立ちまして埋蔵文化財の記録・保存目的で、緊急発掘調査の運びとなりました。

調査の結果、縄文時代から中世にかけての生活跡を発見することができました。これら貴重な資料が今後の"明科"の歴史解明への一助となることと期待します。

最後になりましたが、この調査にあたり、多大なご協力とご理解をいただきました地元の皆様、作業に精力的に打ち込んでいただきました調査団員並びに整理作業員の皆様など、関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

明科町教育委員会
教育長 廣田 健郎

例言

1. 本書は平成15年10月7日から同月31日まで実施した長野県明科町中川手上手屋敷遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は長野県明科町教育委員会が主体となり調査団を組織し実施した。
3. 本報告書作成の作業分担は次のとおりである。
遺構：測量：細尾みよ子、三枝由美、重田昭彦、小須田寛
トレース：堀久士
写真：堀久士
遺物：洗浄・注記・接合・実測：細尾みよ子、三枝由美、清水温子、松林美由紀
トレース：中部測量株式会社
写真：鬼灯書籍株式会社
編集：堀久士
4. 本書の執筆は主に堀が行ったが、「地質編」は関全寿氏に、第3章遺物の「2 土器」は島田哲男氏に玉稿を賜った。記して感謝申し上げます。
5. 土器の実測図では断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器を示し、土師器図中の網かけは黒色処理を示している。
6. 本報告書製作にあたり、現場調査段階から入稿まで太田圭郁氏より多大なるご協力とご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
7. 本調査の出土遺物、記録等は明科町教育委員会が一括保管している。

目次

序
例言
目次

考古編

第1章 調査の概要	
1 調査の経過	1
2 調査体制	1
3 調査の方法	2
4 上手屋敷遺跡の概要	2
第2章 遺構	
1 遺構概観	3
2 住居址	4
3 溝址	5
4 土坑	6
第3章 遺物	
1 石器	9
2 土器	10

地質編

第1章 地形	
1 遺跡の位置	16
2 遺跡周辺の地形	16
第2章 地形形成史	
1 松本盆地の形成	17
2 光段丘面の形成	17
3 犀川河道の変遷	17
第3章 地質	
1 地質概観	18
2 基盤岩	18
3 段丘	19

参考文献一覧
写真
報告書抄録

考古編

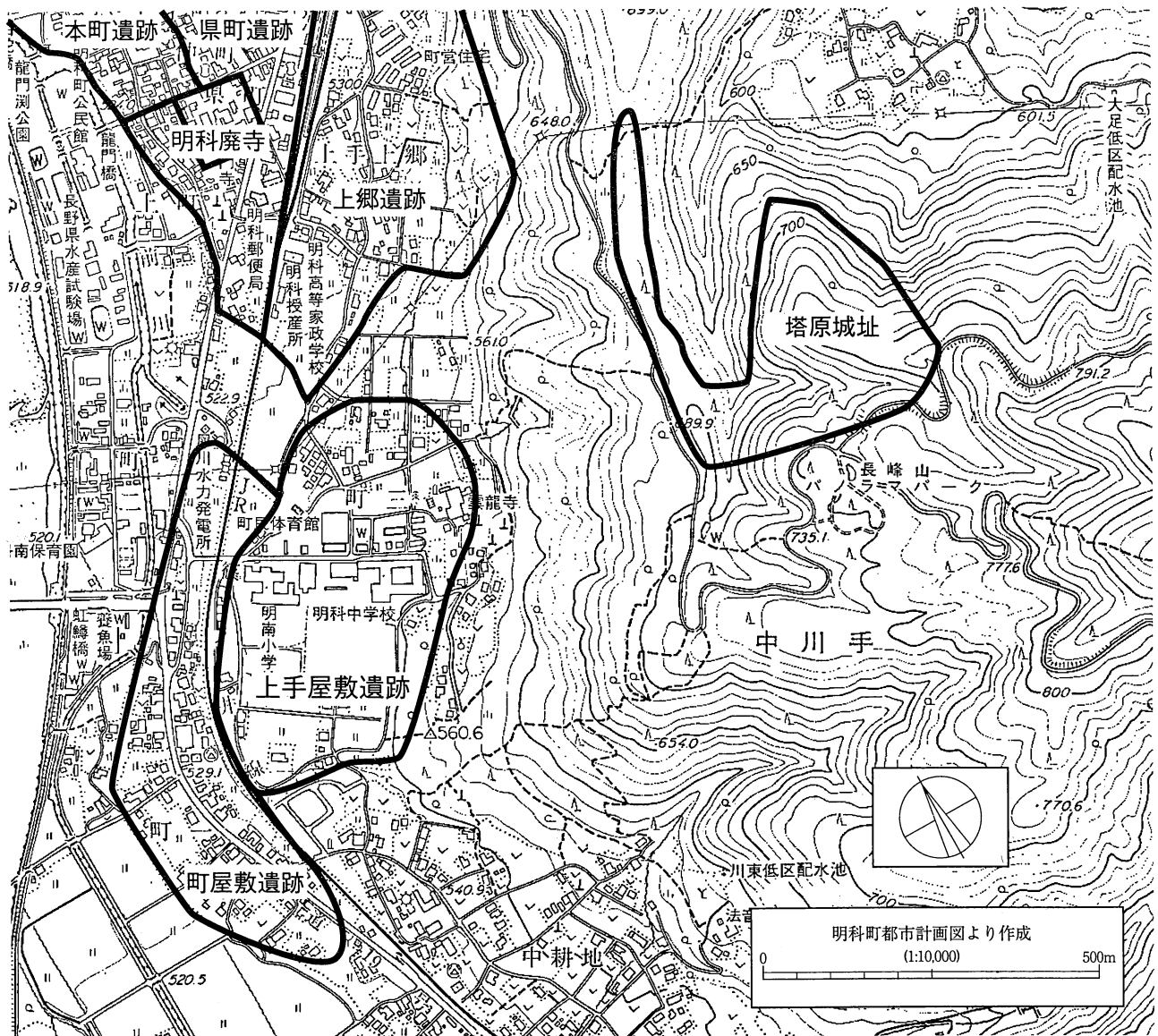
第1章 調査の概要

1 調査の経過

明科町では平成15年度に町営住宅建設工事を計画したところ、その建設予定地が埋蔵文化財包蔵地である上手屋敷遺跡の範囲内にあたることから、平成15年9月6日に本調査前のトレンチ掘りによる試掘調査を町教育委員会が行った。その結果土器片・黒曜岩片などの遺物の他、不自然な落ち込み等が確認されたので、今回の本調査を行うことに決定した。本調査は同年10月7日から同月31日まで行い、その後明科町歴史民俗資料館において回収遺物の洗浄・注記・復元・実測・トレース、並びに遺構測量の図面整理・トレースを行い、原稿執筆と編集作業を経て、平成16年3月に報告書を作成してすべての作業を終了した。尚、現場での重機による表土除去は松枝二三雄氏に委託した。

2 調査体制

- | | |
|-------|---|
| 調査団長 | 廣田健郎(明科町教育委員会教育長) |
| 調査主任 | 堀久士(町教育委員会交流学習課主事) |
| 調査員 | 関全寿(町文化財調査委員長、長野県考古学会会員) |
| 調査補助員 | 細尾みよ子 |
| 調査参加者 | 内川康子、小林善樹、杉浦今朝則、高橋政保、山崎隆典、
宮下廣一、小須田寛、重田昭彦、三枝由美 |
| 整理作業員 | 細尾みよ子、三枝由美、清水温子、松林美由紀 |
| 事務局 | 岩崎久子(町教育委員会生涯学習課課長補佐)、請地誠(同課主査) |



第1図 上手屋敷遺跡の位置

3 調査の方法

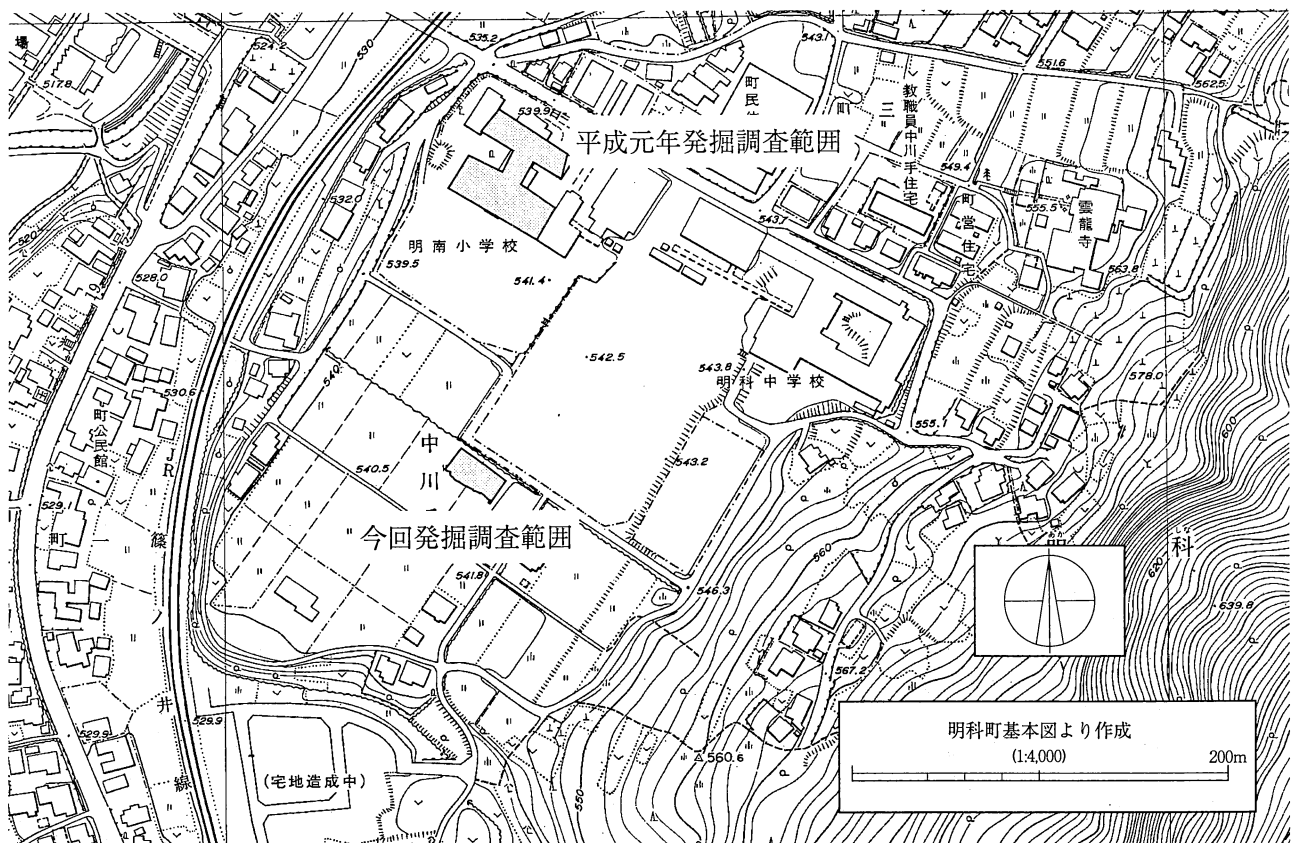
試掘調査の結果と調査予定期間および調査体制を考慮し、調査対象面積は工事対象範囲の北側半分の約400m²に限定した。遺構検出面までの表土除去には大型重機を使用し、その後人力により遺構の検出作業を行い、遺構の範囲・位置を特定した。人力による遺構覆土の掘り下げに並行し、遺構の測量図面を記録した。測量は国家座標X=38590、Y=-51641を基準点とし(EW=0、NS=0)、3mごとのグリッドで調査区を覆い記録した。また、遺構覆土の土層は『新版 標準土色帖』(日本色研事業株式会社1998)を用いて観察し、記録した。出土遺物の取り上げは極力、帰属遺構を確定させてから行ったが、調査予定期間と調査体制などの制約から、出土地点の三次元座標の記録はできなかった。したがって、整理作業においても同様の理由から、土器の復元目的の接合作業は行ったが、調査精度の向上、調査の検証目的の整理作業は実施しなかった。本書では、石器については出土石器の中から実測のし易い石器を実測した。土器の拓本については比較的紋様が明瞭に表現できたものを、実測については復元接合作業をして底部から口縁まで一部でも連続して復元できたものを優先して実測し報告した。

4 上手屋敷遺跡の概要

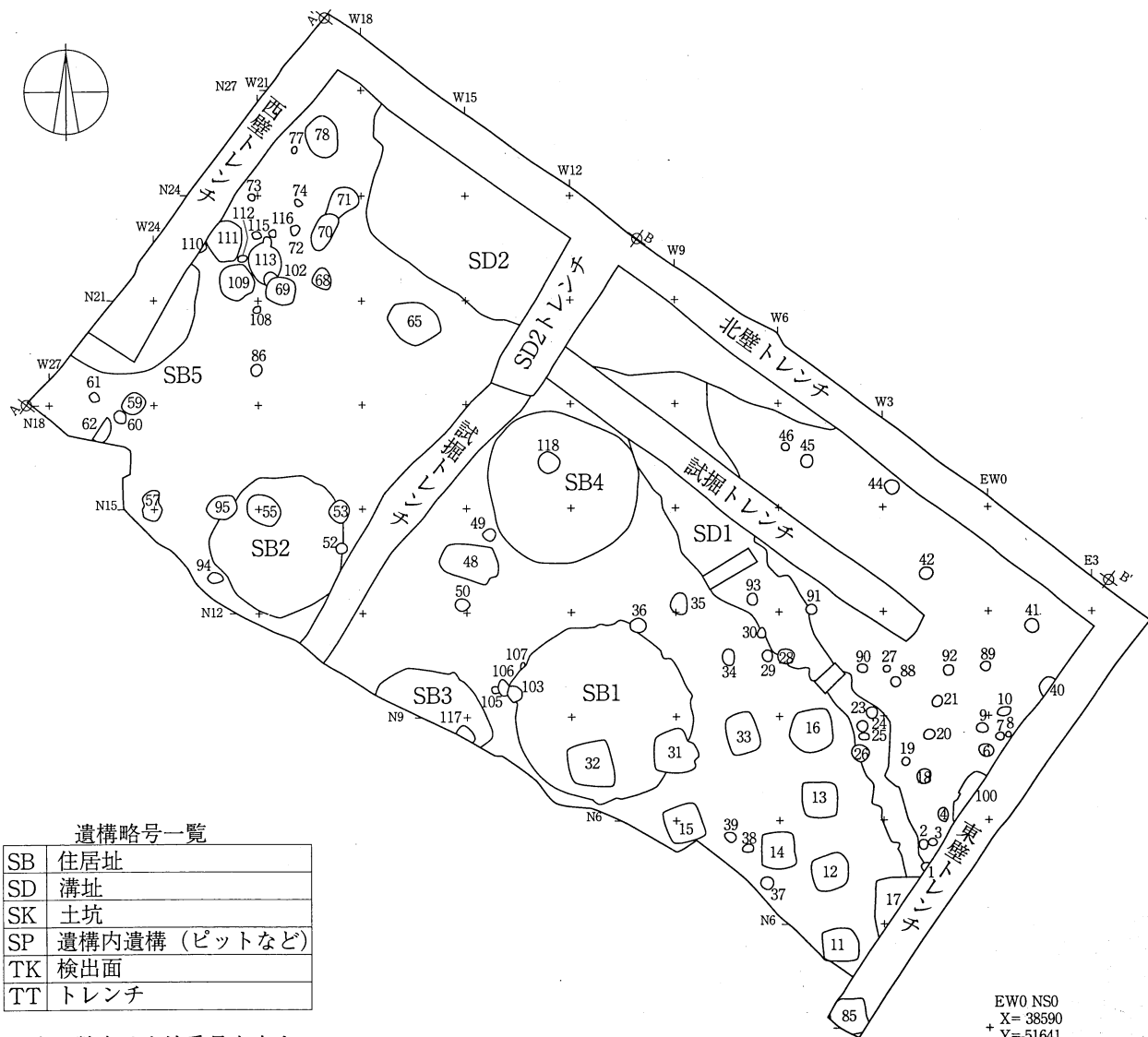
塔原氏の居館跡とされる上手屋敷遺跡は明科町中川手地区塔ノ原上手屋敷地籍内(中川手2544-2555番地)の段丘上に位置する。遺跡の標高はほぼ550m程度で、段丘崖下の西側にはJR篠ノ井線と国道19号が、さらにその西にはこの段丘を形成した犀川が南北に併走する(地質編参照)。現在、居館跡としての痕跡はほとんど見受けられないが、1945年以降開田されるまでは用水堀跡があったといわれ、遺跡の南側には「腰巻」、西側崖下には「腰曲輪」などの地名が残るほか、東には塔原氏の菩提寺である雲龍寺があることから窺い知ることができる。

塔原氏は、鎌倉時代末期ごろに小県郡方面から進出してきた海野氏の一族といわれ、遺跡の東側に位置する能念寺山に塔原城を、当地には居館を築き、また当遺跡の西側に隣接する町屋敷遺跡には配下の者たちを居住させた。その後、塔原氏は天文22(1553)年武田氏に攻められ、さらに天正11(1583)年小笠原氏により滅ぼされ、そのときに居館跡も壊されたと伝承される。

塔原(海野)氏が明科地域に進出してくる以前から「塔ノ原」の地名はあっただろうが、それに関する史料は得ていない。昭和28(1953)年の明科中学校建設の際には、敷地から内耳土器・古瀬戸・黄瀬戸などの陶器と宝篋印塔相輪が出土している。また、平成元年の明南小学校校舎改築にあたり行なわれた発掘調査では縄文時代前期および奈良時代の集落跡が発見されており、この遺跡の段丘の北西には古代寺院遺跡の明科廃寺も位置していることから、古代の明科の歴史を解明する上で非常に重要な意味を持つ遺跡と言える。



第2図 調査位置



第3図 調査区全体図

第2章 遺構

1 遺構概観

調査直前まで畑地であった調査区の表土は20cmから厚いところでは50cmほどが客土または耕作によつての攪乱土である。また、現地形は南東方向から北西にむかって傾斜しており、検出面もそれにしたがったが、調査期間の短縮のために遺構の検出を容易にする目的で、検出面を大分低く設定した。

今回の調査では、竪穴住居址5軒、土坑118基(このうち記録不備などから28基を欠番とした)、溝址2条を検出した。すべての遺構について半掘ないし、四分割をし、覆土の堆積物を観察し記録した。

これら遺構は、出土遺物と遺構の切り合い状況などから、大きく縄文時代前期、古代、中世の3時期に帰属すると考えられる。以下では遺構ごとに特徴を述べるが、土坑については、本項ですべて記述することは割愛し、調査区南東部において検出した柱穴痕を含む土坑10基(第11・12・13・14・15・16・31・32・33・85号土坑)について述べることに留めた。

2 住居址

第1号住居址

平面プランがほぼ円形を呈する竪穴住居址である。検出段階から複数の遺構の切り合いと想定していたが、断面を確認しながら掘り進めるうちに、本遺構を切る第31・32・36号土坑3基と、本遺構に切られる第105・106・107号土坑を確認した。この内第32号土坑からは内黒の土師器(p.11 No.32)が出土しているので、本遺構と第32号土坑との切り合い関係は遺物の帰属年代の新旧と整合する。検出面を低く設定したので、覆土は粘質土主体のほぼ単層である。床面には14基のピットを確認した。出土遺物はチャート製2点の石器(p.9 No.5・8)と、安山岩製の石皿(p.9 No.2)を回収した。土器では(p.11 No.1~44、p.12 No.123、p.13 No.202)を回収した。

第2号住居址

第1号住居址と同じく、平面プランがほぼ円形を呈する竪穴住居址だが、第1号住居址より平面形はだいぶ小さい。覆土は単層だが、この地点は耕作による攪乱が深くまで及んでいたため、プランの確定は困難だった。第52・53・55・95号土坑に切られる。出土遺物は(p.11 No.47~63、p.13 No.122・307)を回収した。

第3号住居址

調査区南壁に遺構が半分かかるが、他の住居址同様におそらく平面形は円形を呈するものと思われる。断面からは、遺構の壁の立ち上がりが検出面よりもう40cmほど高かったことが確認でき、表土直下が遺構の確認面だったことがわかる。第117号土坑によって切られる。出土遺物は(p.11 No.64・65、p.12 No.66)を回収した。

第4号住居址

平面プランがほぼ円形を呈する竪穴住居址である。重機による表土剥ぎ段階で、かなり深く表土を削除したので、本遺構も覆土はわずかだった。出土遺物は(p.9 No.10・11)の石器と(p.12 No.67~87)の土器片を回収した。第118号土坑によって切られ、東側のわずか一部を第1号溝址によっても切られる。

第5号住居址

調査区西壁によってプランのほぼ半分を切られるが、おそらくほぼ円形を呈すると思われる竪穴住居址である。検出面を設定するときに層序を確認する目的で調査区壁に沿わせて直線かつ機械的にトレンチを設定したので、西壁トレンチによって床面を完全に掘り下げた。しかしながら、ほかの住居址では確認できなかったが、わずかに残った床面からは面的に広がる焼土を確認した。出土遺物は(p.12 No.88~103)の土器を回収した。

3 溝址

第1号溝址

第4号住居址以外の接触するすべての遺構に切られる。遺物は一点も回収されていない。地形は北西方向へ傾斜しているためそれにそった流れであっただろう。堆積物などからも特に人為的要素は確認できなく、自然の流路跡と考えられる。

第2号溝址

第1号溝を切る。出土遺物は上述した住居址からの遺物とは性格を異にし、古代末から中世、16世紀代まで帰属年代がぐだつたものが出土した(p.10参照)。また、覆土中には先の土器のほか凹石(p.9 No.12)、回収はしなかったが、礫片などの礫石器が出土したので、人為的に埋められた溝である可能性が高い。しかしながら、調査区の北壁に遺構がかかっており、検出できた部分はおそらくこの溝址のごく一部ではないかと考えられる。調査期間の制約から、検出した東半分は掘り残した。偶蹄類の獣骨片も確認した。

4 土坑

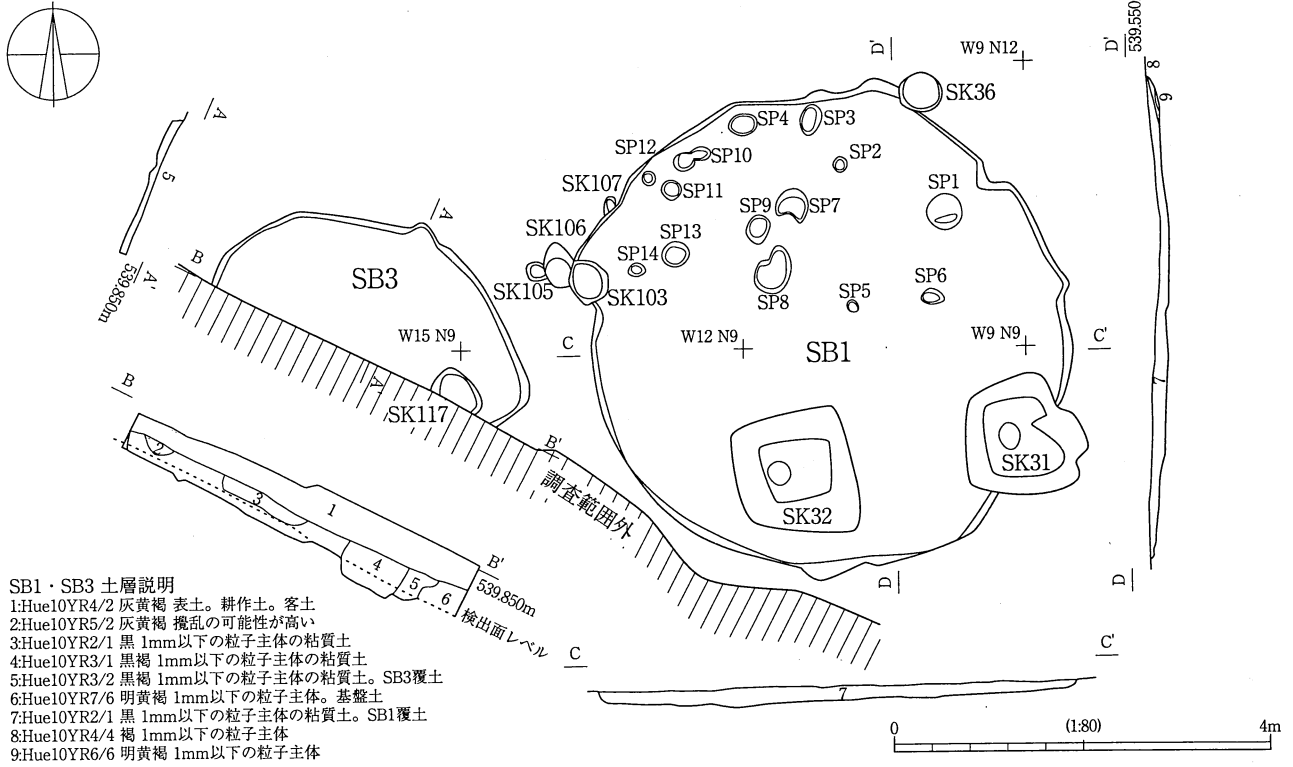
第11・12・13・14・15・16・31・32・33・85号土坑

これら10基の土坑は調査区南東に位置し、第14・15号土坑を除けば、どれもほぼ整然と等間隔に並ぶ。またその内部には10基すべての土坑に柱穴痕らしき土層を確認した。土坑の平面形はいずれも円形よりは正方形に近く、一辺の長さはほぼ1mである。柱穴痕の中心から隣の柱穴痕の中心までの距離はほぼ2m間隔である。仮にこれら10基の土坑が同一時期に帰属するものだと仮定し、掘建柱建物などの建造物の柱跡だと仮定すれば、南北に4間、東西に3間の長方形プランの北東部分を検出したと想定できるが、南側は未調査なので、同様の規模の土坑がまだ埋蔵されている可能性があり、想定できる建造物のプランは一様には定まらない。

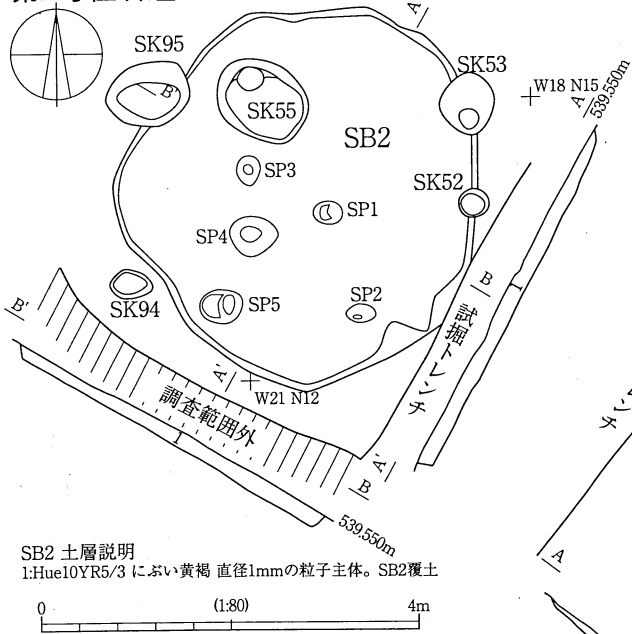
第31・第32号土坑は第1号住居址を切る。また第32号土坑からは内黒の土師器(p.14 No.310)が出土しているが、同遺構からは(p.12 No.112~115)の土器が出土し、第33号土坑からも(p.12 No.116)が出土している。

ちなみにこれら土坑群の東で検出した第17号土坑からは瓦の破片(p.13 No.110)を一点だけ確認した。

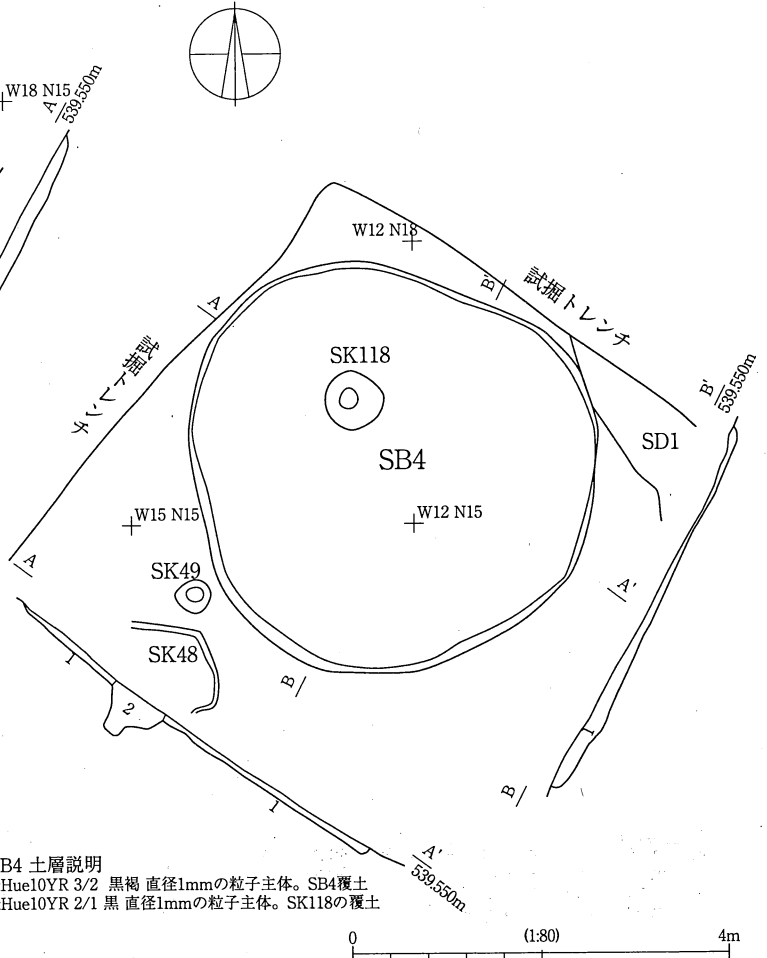
第1号住居址・第3号住居址



第2号住居址

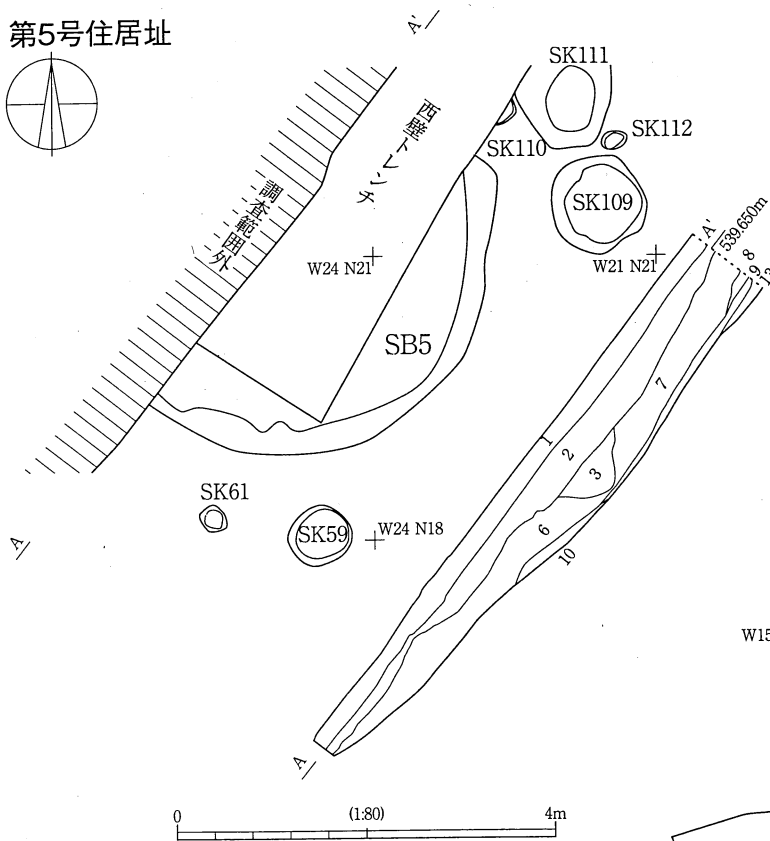


第4号住居址



第4図 遺構別図 (その1)

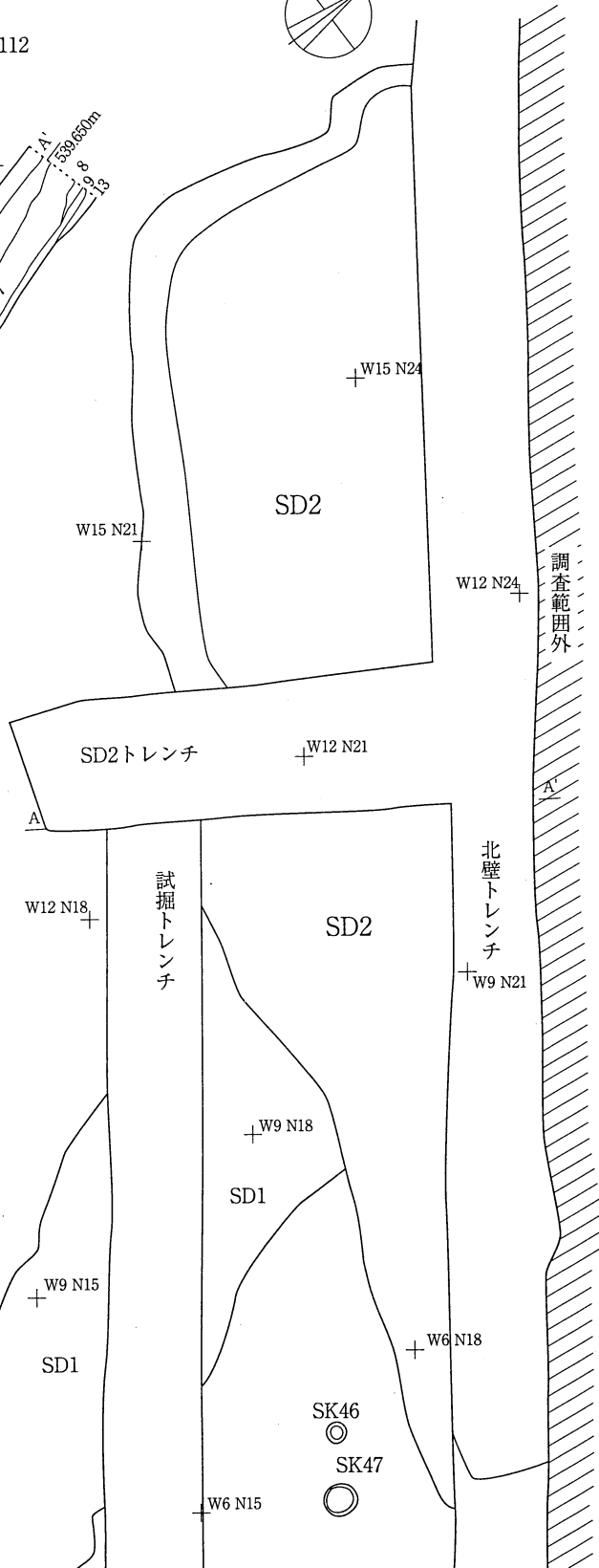
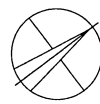
第5号住居址



SB5土層説明

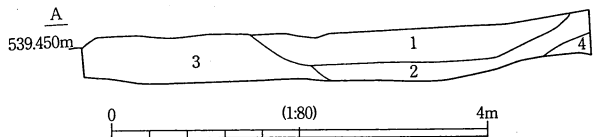
- 1:Hue10YR4/1 褐灰 下部に鉄分の沈着が認められる。耕作土。表土
- 2:Hue10YR4-5/2 灰黄褐 容土。堅くしまる
- 3:Hue10YR1.7/1 黒 直径1mm粒子主体
- 6:Hue10YR2-3/3 黒褐~暗褐 直径50mm礫を20%程度含む
- 7:Hue10YR2-3/3 黒褐~暗褐 焼土粒子を極微量含む。黒曜石片を確認
- 8:Hue10YR3/3 暗褐 直径1mm粒子主体。粘質
- 9:Hue10YR3/3 暗褐 直径1mm粒子主体。炭化物を微量含む
- 10:Hue10YR3/1 黒褐 直径50mm礫を20%程度含む
- 13:Hue10YR7/6 明黄褐 直径1mm以下の粒子主体のシルト層。基盤層

第1号溝址



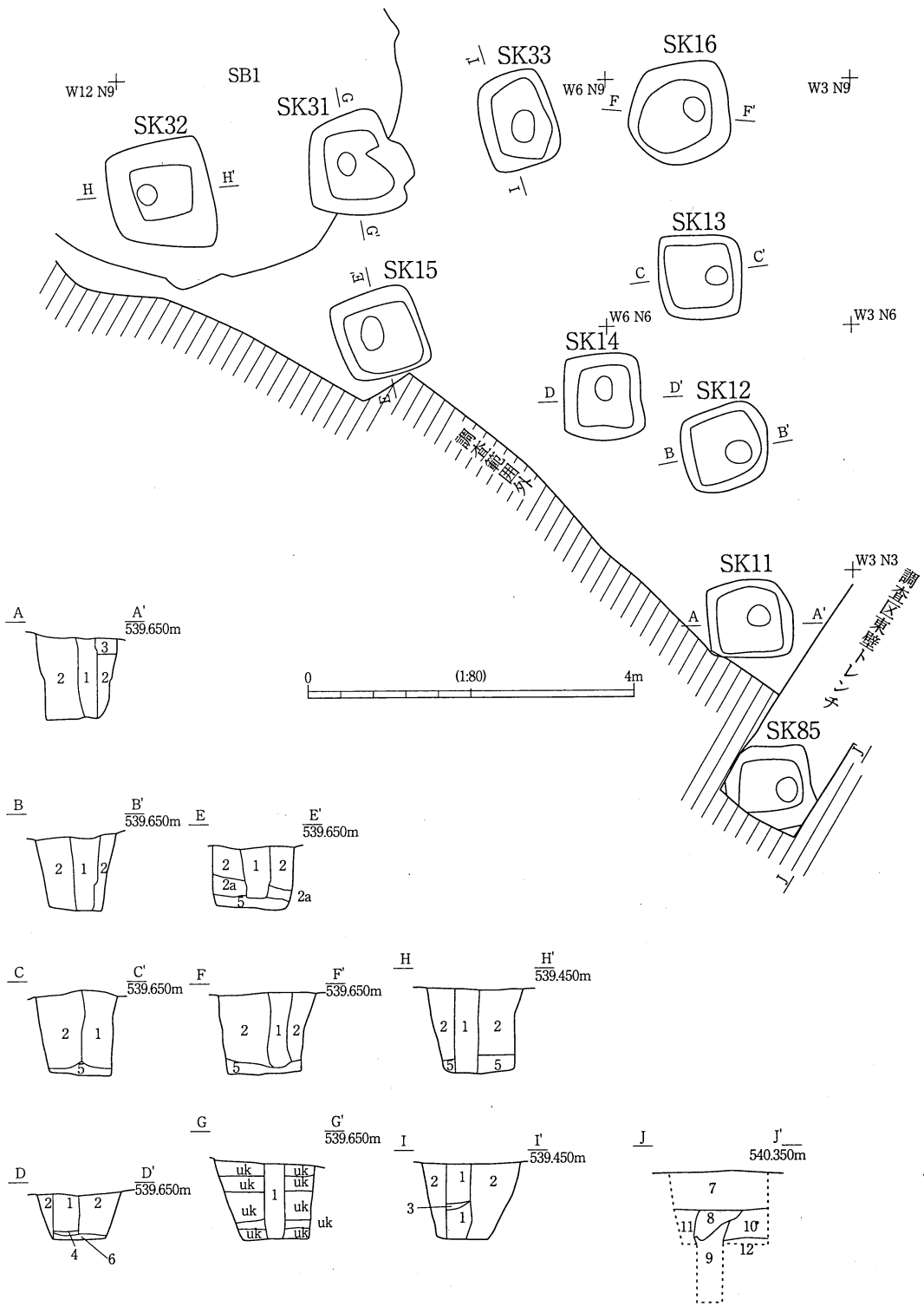
SD2土層説明

- 1:Hue10YR2/2 黒褐 直径5cm以上の礫を20%含む。SD2覆土。粘質土。
- 2:Hue10YR3/2 黒褐 直径5cm以下の礫を10%含む。SD2覆土。
- 3:Hue10YR4/1 褐灰 直径2~3cmの礫主体。SD1覆土。
- 4:Hue10YR3/2 黒褐 直径2~3cmの礫主体。



第5図 遺構別図 (その2)

第11,12,13,14,15,16,31,32,33号土坑

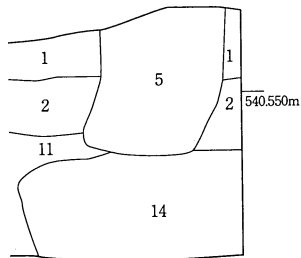
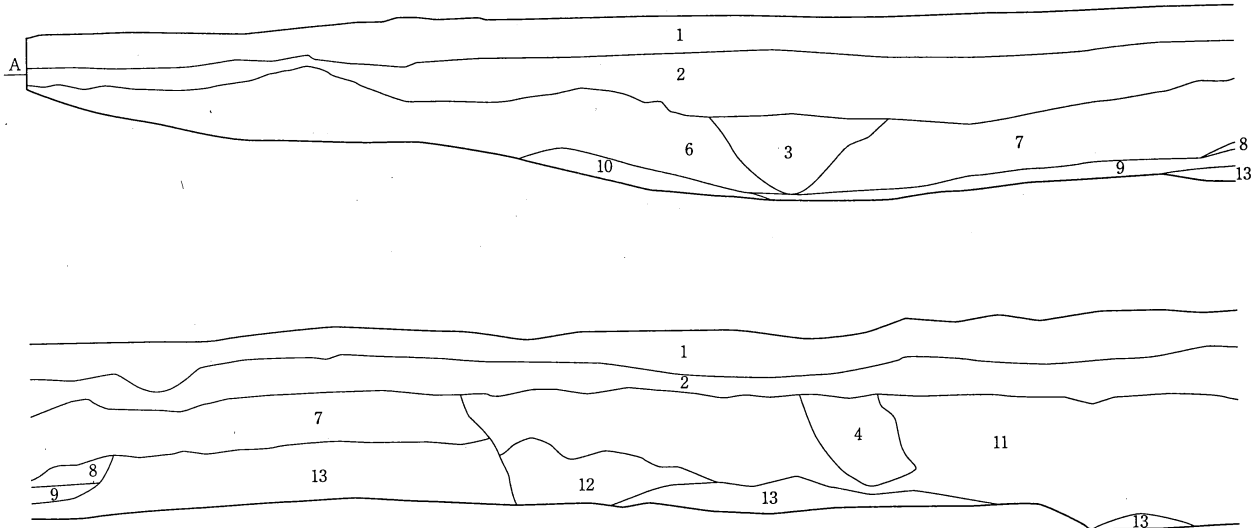


土層説明

- 1:Hue10YR3/1 黒褐 直径1mm以下の粒子主体。
- 2:Hue10YR4/3 におい黄褐 直径3~5cm大の礫を30%含む。褐色土主体に明黄褐色土がブロック状に混在。
- 2a:Hue10YR4/3 におい黄褐 直径15cm以上の礫を10%含む。
- 3:Hue10YR3/1 黒褐 直径1mm以下の粒子主体。第1層より粗密。
- 4:Hue10YR7/1 灰白 粘土。
- 5:Hue10YR2/1 黒 粘質土。
- 6:Hue10YR7/6 明黄褐 1mm以下の粒子主体。基盤層。
- 7:Hue10YR3/3 暗褐 表土。客土。
- 8:Hue10YR2/2 黒褐 黄褐色粒が混じる。SK85覆土。
- 9:Hue10YR2/2 黒褐 第8層より少ないが、黄褐色粒が混じる。SK85覆土。
- 10:Hue10YR3/3 暗褐 遺構覆土の可能性あり。
- 11:Hue10YR3/3 暗褐 遺構覆土の可能性あり。
- 12:Hue10YR7/6 明黄褐 直径1mm以下の粒子主体。基盤層。
- uk:記録不備

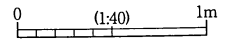
第6図 遺構別図 (その3)

調査区西壁土層図

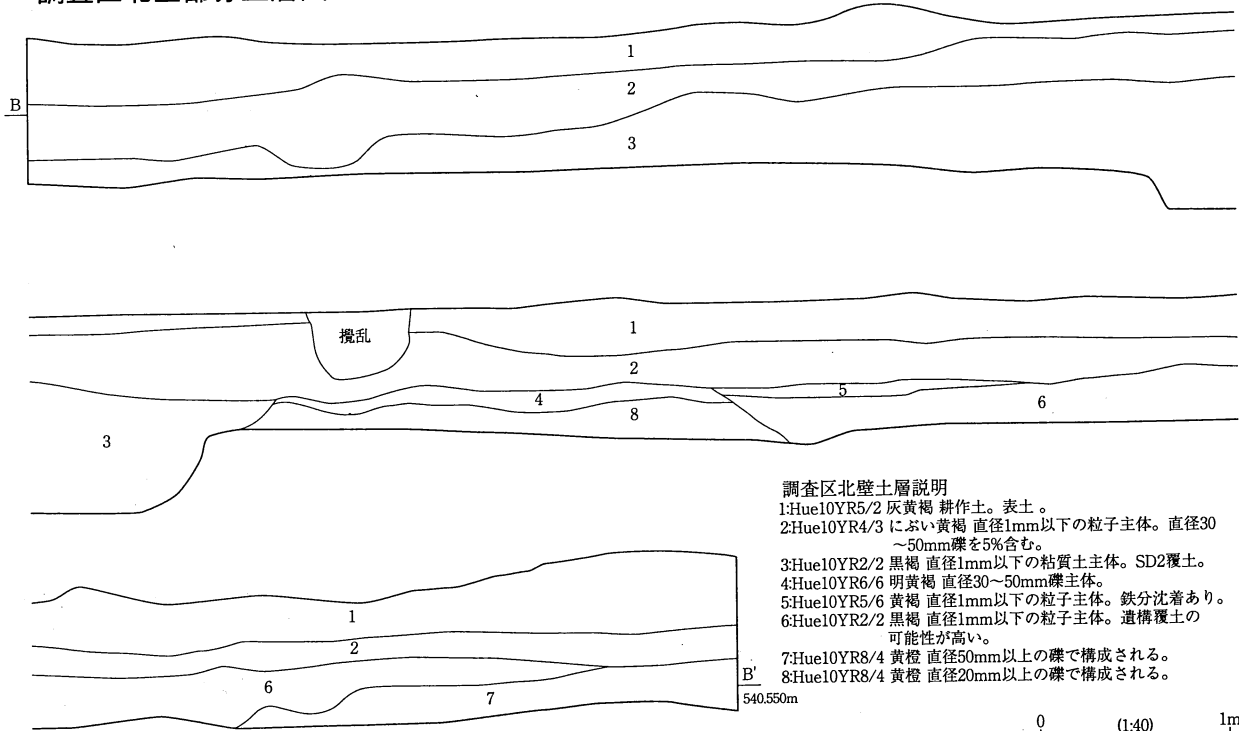


調査区西壁土層説明

- 1:Hue10YR4/1 褐灰 下部に鉄分の沈着が認められる。耕作土。表土
- 2:Hue10YR4-5/2 灰黄褐 客土。堅くしまる。
- 3:Hue10YR1.7/1 黒 直径1mm粒子主体。
- 4:Hue10YR2/2 黒褐 直径30~50mm礫を20%程度含む。
- 5:Hue10YR2/2 黒褐 直径30~50mm礫を40%程度含む。
- 6:Hue10YR2-3/3 黒褐~暗褐 直径50mm礫を20%程度含む。
- 7:Hue10YR2-3/3 黒褐~暗褐 焼土粒子を極微量含む。黒曜石片を確認。
- 8:Hue10YR3/3 暗褐 直径1mm粒子主体。粘質。
- 9:Hue10YR3/3 暗褐 直径1mm粒子主体。粘質。炭化物を微量含む。
- 10:Hue10YR3/1 黒褐 直径50mm礫を20%程度含む。
- 11:Hue10YR3/2 黒褐 直径1mm粒子主体。粘質土。直径20~30mm礫を20%程度含む。
- 12:Hue10YR3/2 黒褐 主体は第11層だが、第13層が30%程度混入。
- 13:Hue10YR7/6 明黄褐 直径1mm以下の粒子主体のシルト層。基盤層
- 14:Hue10YR5/4 におい黄褐 直径30mm礫を50%程度含む。礫層。

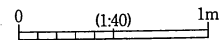


調査区北壁部分土層図

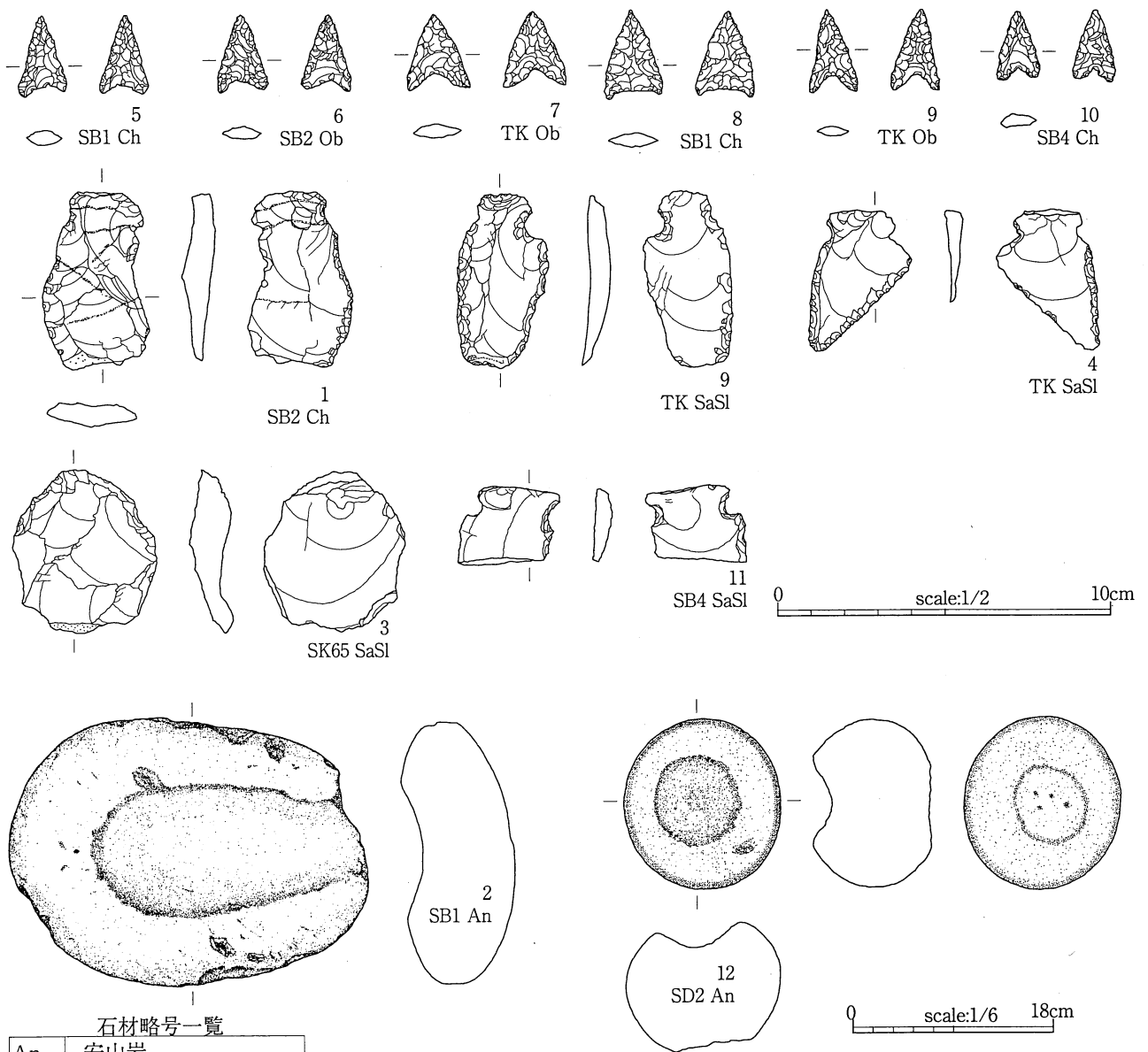


調査区北壁土層説明

- 1:Hue10YR5/2 灰黄褐 耕作土。表土。
- 2:Hue10YR4/3 におい黄褐 直径1mm以下の粒子主体。直径30~50mm礫を5%含む。
- 3:Hue10YR2/2 黒褐 直径1mm以下の粘質土主体。SD2覆土。
- 4:Hue10YR6/6 明黄褐 直径30~50mm礫主体。
- 5:Hue10YR5/6 黄褐 直径1mm以下の粒子主体。鉄分沈着あり。
- 6:Hue10YR2/2 黒褐 直径1mm以下の粒子主体。遺構覆土の可能性が高い。
- 7:Hue10YR8/4 黄橙 直径50mm以上の礫で構成される。
- 8:Hue10YR8/4 黄橙 直径20mm以上の礫で構成される。



第7図 調査壁図



石材略号一覧

An	安山岩
Ch	チャート
Ob	黒耀岩
SaSl	砂質粘板岩

第8図 石器実測図

第3章 遺物

1 石器

重機による表土剥ぎによって回収できなかった石器は相当量と考えられる。また、調査予定期間および調査体制などの制約から、遺物の出土地点の三次元座標は記録しなかった。したがって、整理作業では石器の接合作業をおこなっていない。

本報告書でとりあげた石器は、実測図では実測のし易いものを図化したにすぎず、回収した石器は整理用のテン箱でおよそ三箱になった。そのほとんどは黒耀岩製のチップや剥片であり、そしてそのほとんどが、第1・4・5号住居址からの出土だった。

石材は上述の黒耀岩のほか、安山岩・チャート・砂質粘板岩を確認した。器種では様々なものが見られるが、No.5・6・7・8・9・10のような鏃形石器を確認した。また、No.1・3・4・9・11のように二次加工痕を残す石器は回収石器の中では多い。No.2、No.12には敲打痕が多く残る。

2 土器

今回の調査においては、1 縄文時代前期前葉、2 古代(平安時代)、3 中世(室町時代)の遺物が発見されているが、強粘土の土層であり、遺物の遺存は良好とはいえないものであった。以下それぞれについて記述する。

縄文時代前期前葉

第1号住居址(p.11 No.1~44、p.12 No.123、p.13 No.202)、第2号住居址(p.11 No.47~63、p.13 No.122・307)、第3号住居址(p.11 No.64・65、p.12 No.66)、第4号住居址(p.12 No.67~76・79~87)、第5号住居址(p.12 No.88~103)の5軒の住居址、第14号土坑(p.12 No.77)、第32号土坑(p.12 No.112~115)、第33号土坑(p.12 No.116)、第76号土坑(p.12 No.109)、第87号土坑(p.12 No.117)、第107号土坑(p.12 No.118)、第113号土坑(p.12 No.119)の7基の土坑(ただし、第14・32・33号土坑は古代の建物址の柱穴であり、この時期に該当する遺構ではない)、検出面(遺構外)から(p.12 No.104~108・120)が出土している。これらの土器群は、ほぼ同時期のものと考えられる。

ほとんどが胎土に繊維を含んでいるもので、縄文が施文されているものがほとんどである。No.307は中越式の器形に似ているが繊維を含み、図示できなかったが薄く網目状捺糸文が施されていることから、中越式系と繊維を含む縄文系土器の折衷タイプの土器と考えられる。No.81・118は繊維を含む網目状捺糸文が施された深鉢である。

No.122・123は繊維を胎土に含まない薄手の堅い焼きの中越式系の深鉢である。No.123には頸部に篋による指突文が見られる。

p.9の出土土器のなかではNo.12を除き、この時代に属するものと考えられる。No.5~10の5点は石鏃、1・4・9・11の4点は石匙、3はスクレイパー、2は安山岩製石皿で縄文時代中期型であるが、第1号住居址の床面から出土しており、富士見町坂平遺跡からも多くこの型の石皿が、この時期の住居址から見つかっていることからこの時期に属する石皿と考えられる。

古代(平安時代)

p.13 No.110・310・311、p.14 309・312・314・319、p.15 No.308・313・315~318が該当する。

No.110は第17号土坑から出土した丸瓦の破片で篋により整形されている。No.310は第32号土坑から出土した高台付の黒色土器の杯で9世紀末ごろと考えられる。No.311は第78号土坑から出土した須恵器の杯蓋である。No.309・No.312・314・319は中世の溝(堀?)と考えられる第2号溝址埋土から、No.308・313・315~318は検出面(遺構外)から出土した平安時代の遺物である。No.313・314は黒色土器杯、No.308・315・317・318は土師器杯、No.309・316・319・320は須恵器杯、No.312は須恵器杯蓋。

これら出土土器は、総じて9世紀中頃から10世紀前半のものと考えられる。

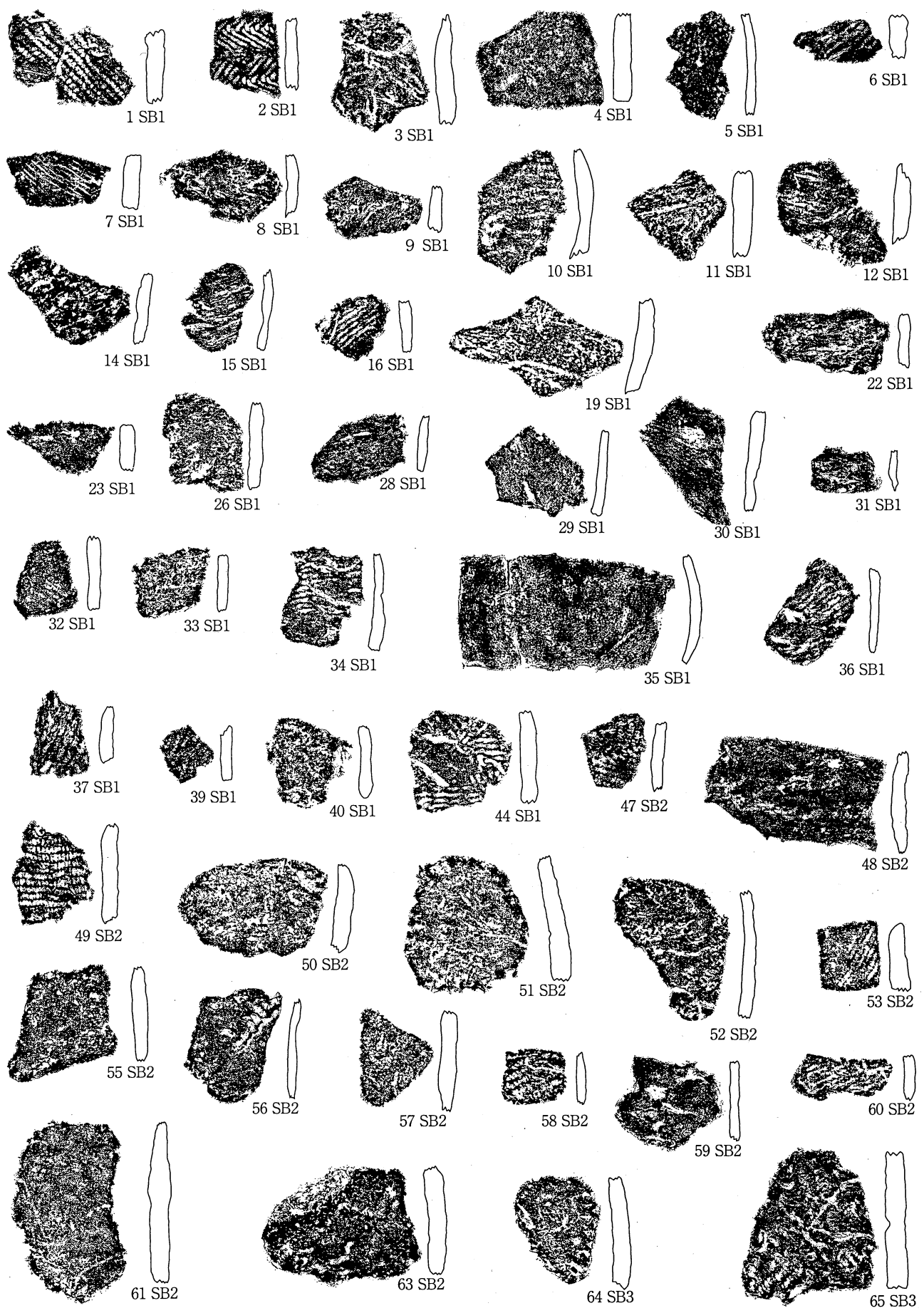
中世(室町時代)

陶磁器(p.14 No.301・302)、内耳鍋(p.14 No.303・304、p.15 No.305)、凹石(p.9 No.12)がある。No.301~304、凹石のNo.12は中世の溝(堀?)と考えられる第2号溝址埋土から出土したもので、このほかは検出面(遺構外)から出土したものである。

No.301は竜泉窯系の青磁の碗であるが、刻まれた花卉は簡略化され薄く刻まれており、15世紀代のものであろう。No.302は瀬戸産?の折縁深皿で15世紀後半頃と考えられる。内耳鍋は16世紀前半頃のものであろう。

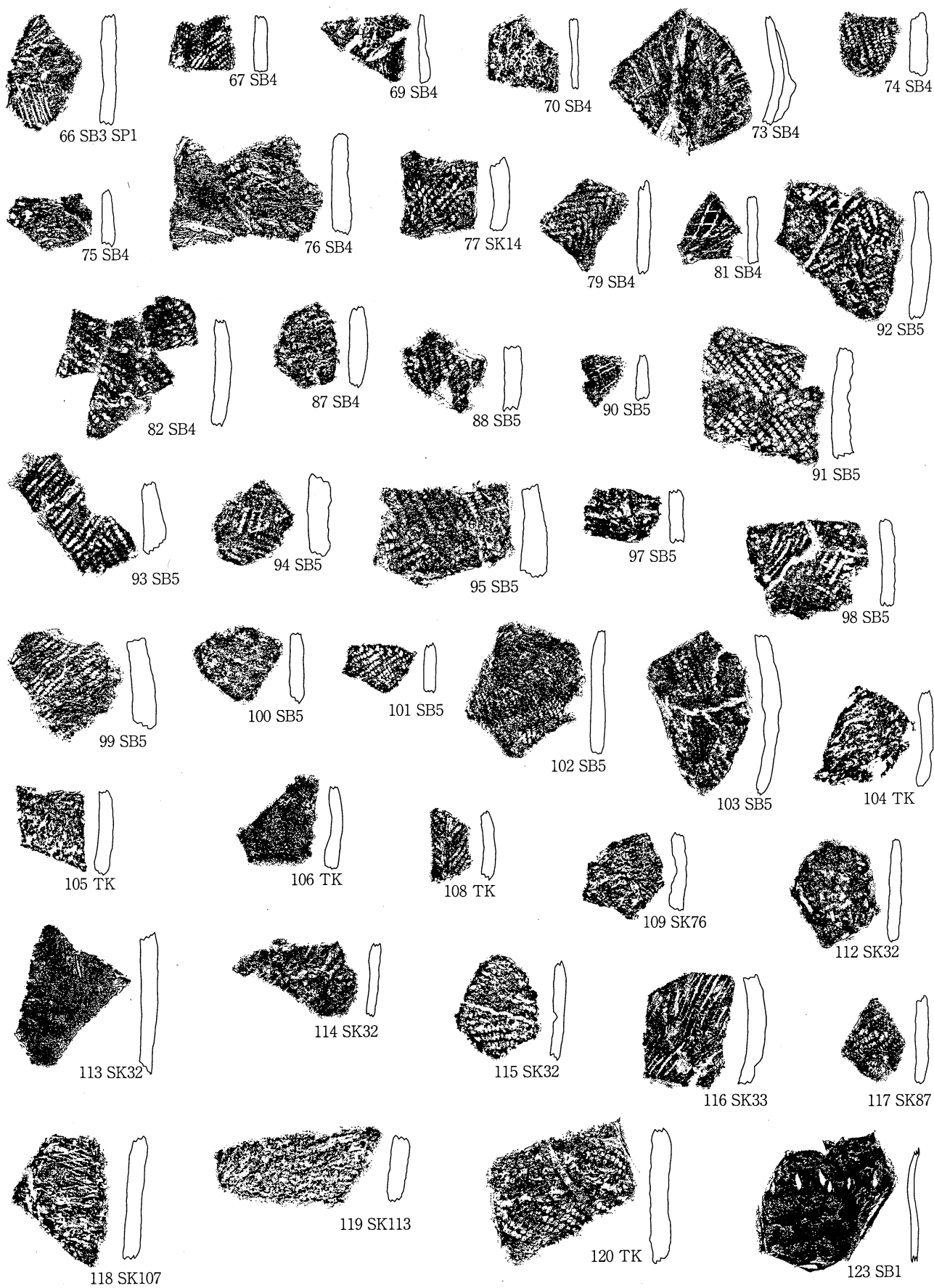
凹石は安山岩製で、この形のものがこの時期に良く見られるが擂鉢のように使われた可能性が考えられる。

これら遺物の存在から中世の溝(堀?)と考えられる第2号溝址を中心としたこの時代の遺構は、15世紀後半から16世紀代に該当するものと考えられる。



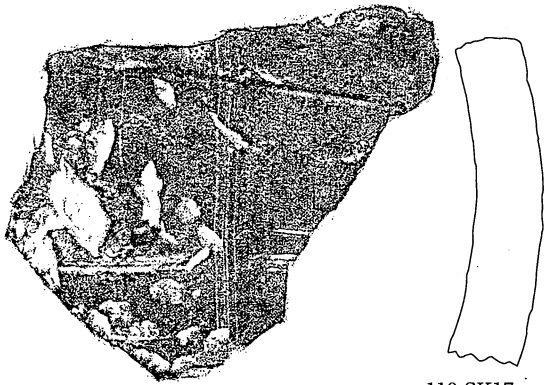
0 scale:1/3 18cm

第9図 土器拓本図(その1)

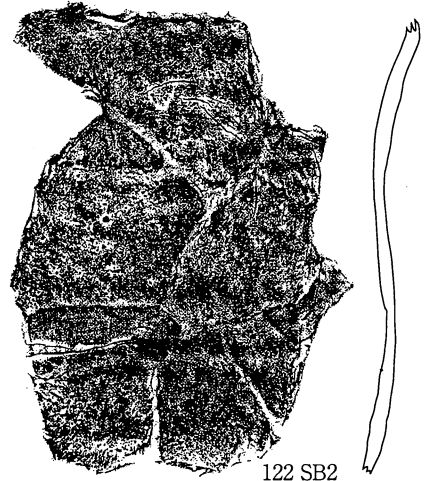


0 scale:1/3 18cm

第10図 土器拓本図(その2)

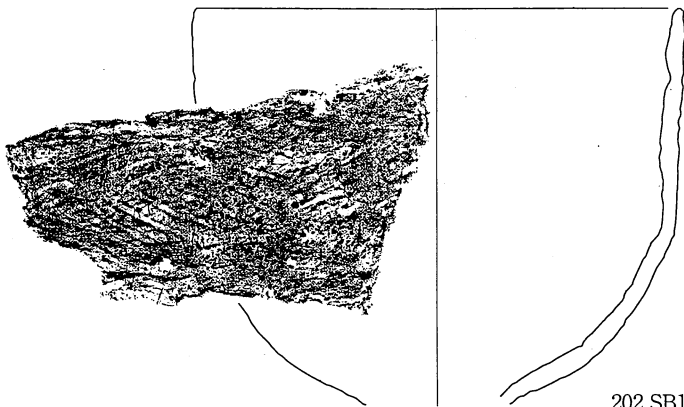


110 SK17

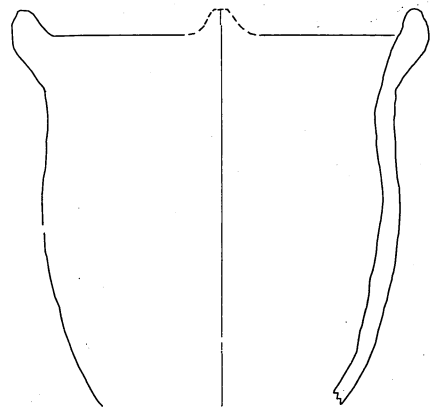


122 SB2

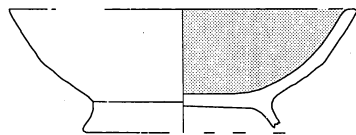
第11図 土器拓本 (その3)



202 SB1



307 SB2



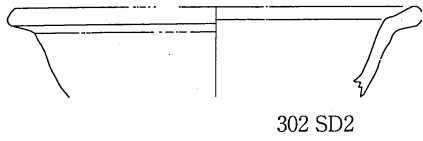
310 SK32



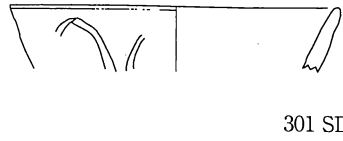
311 SK78

0 scale:1/3 18cm

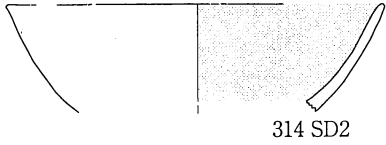
第12図 土器実測図 (その1)



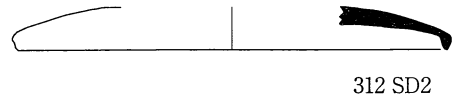
302 SD2



301 SD2



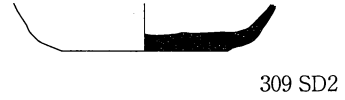
314 SD2



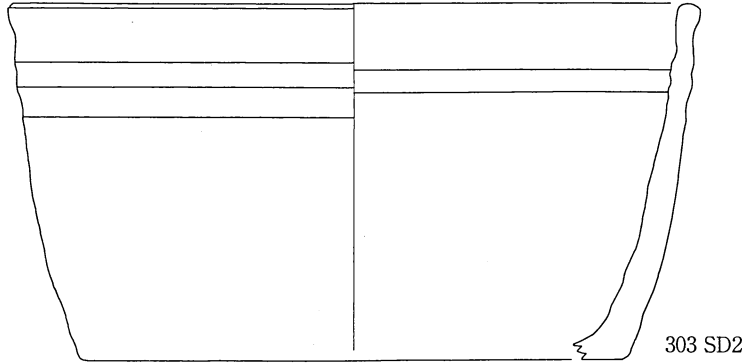
312 SD2



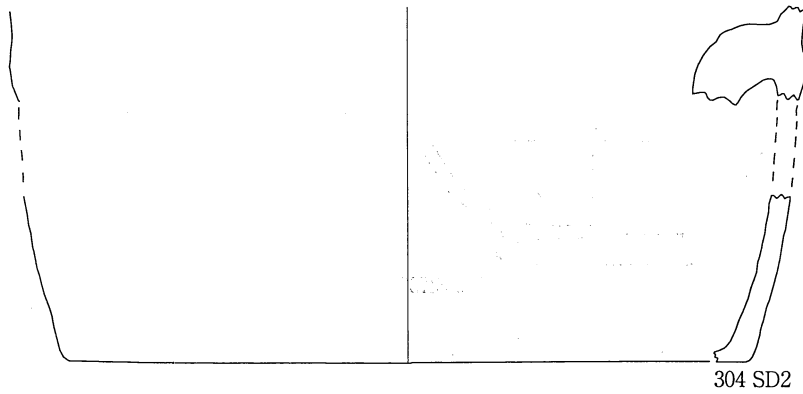
319 SD2



309 SD2



303 SD2



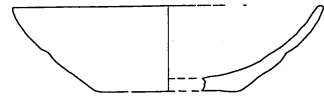
304 SD2

0 scale:1/3 18cm

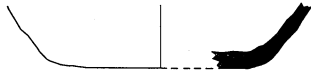
第13図 土器実測図 (その2)



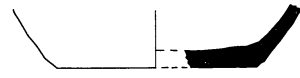
313 TK



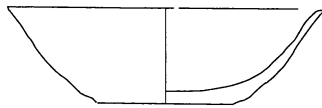
308 TK



316 TK



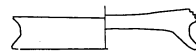
320 TK



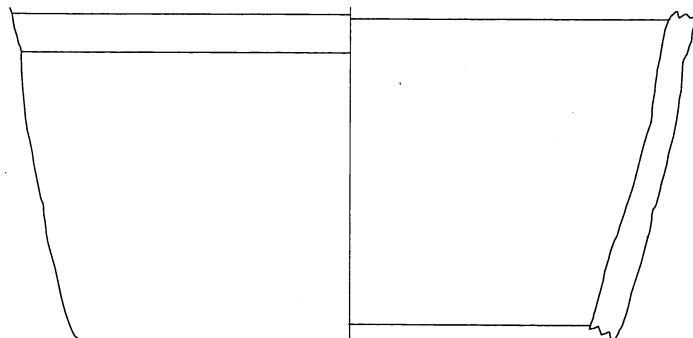
317 TK



315 TK



318 TK



305 TK

0 scale:1/3 18cm

第14図 土器実測図 (その3)

地質編

第1章 地形

1 遺跡の位置

上手屋敷遺跡は、長野県東筑摩郡明科町大字塔ノ原上手屋敷地籍内に所在する。長野県の中西部に紡錘形に広がる松本盆地のほぼ中央東縁、高瀬、穂高川など三川が合流する盆地の最低地、犀川右岸の低位段丘上に立地し、明科中学校、明南小学校などが建てられている。

この低位段丘は、長峰山地の山麓に沿い南北に細長く延びる河岸段丘で、狭義の第一段丘面「上手屋敷面」と第二段丘面「明科面」が存在し、上手屋敷面は東西約300m、南北400mあまりの台形を呈して平坦であり、西へ突き出ている。

遺跡は、上手屋敷面のほぼ中央部を占める。

上手屋敷面の標高は、ほぼ545～550mを測り、段丘崖下の明科面上をJR篠ノ井線と国道19号が、南北に縦走する。

気候は中央高地式に属し、気温の年較差は25℃、年降水量は1,050mm内外、四季の変化に富み、年間を通して太陽に恵まれた自然環境にあると言える。

2 遺跡周辺の地形

遺跡の前方眼下に、狭い明科段丘面を挟んで御宝田の湧水地帯を通し、安曇野の穀倉地帯や犀川谷が、一望出来る好環境下に存在する。

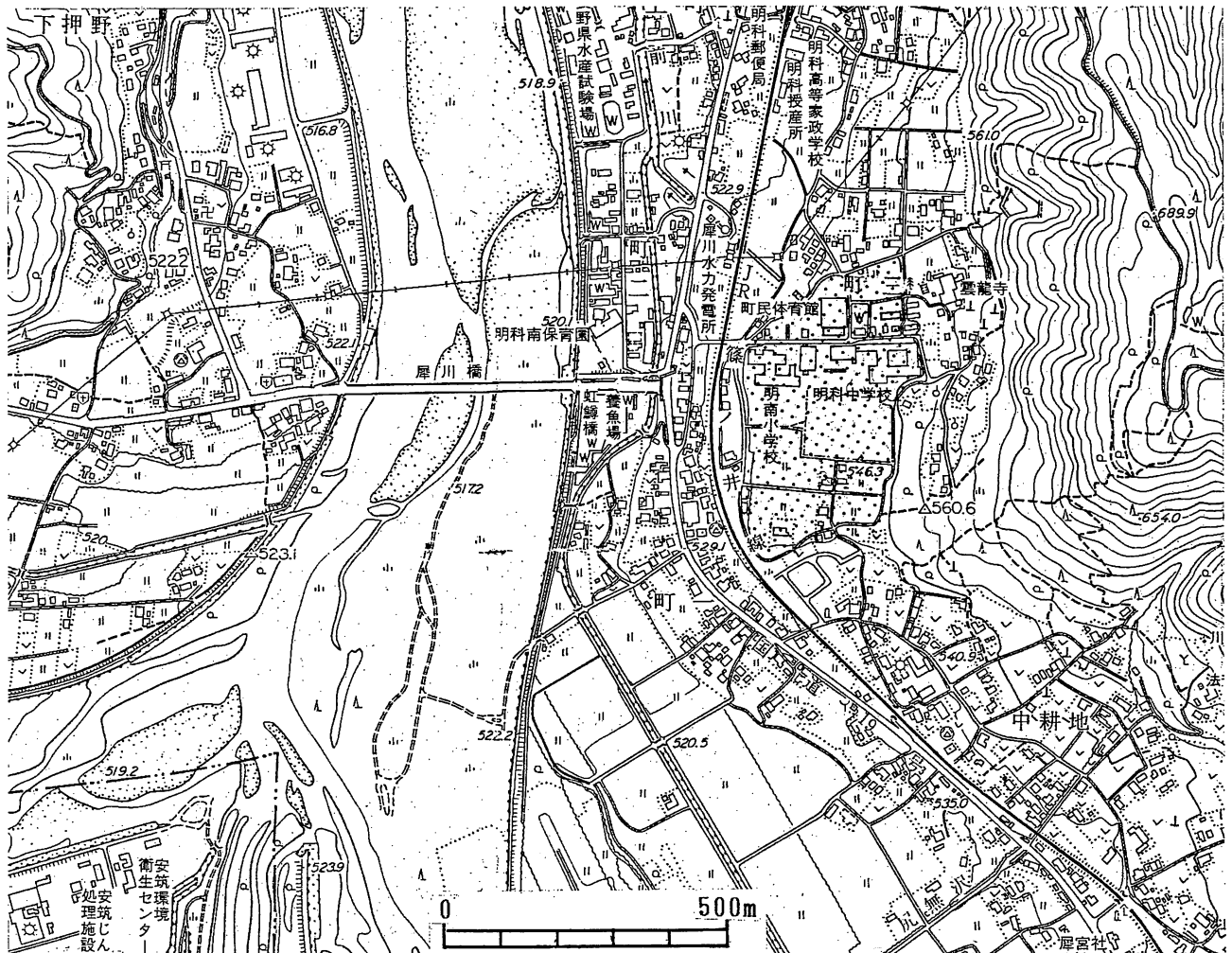
一方、背後には標高900m内外の長峰山地が続き、山麓には尾敷沢、尻無沢、鷯の目沢など小溪流がつくる扇状地や崖錘地形が発達して、古くは一円の桑園地帯となっていた。

台地状を呈する上手屋敷段丘は、山列方向が南東方向から南北方向への変換点に位置しており、山地の地すべり崩壊による崩落層が一部を覆うものの、大部分は形成当時の原形面を保ち、砂礫土である。

戦後、桑園から開田された際、重機によって表土が移動され、遺構直上または遺構まで攪乱されている。

また南側段丘崖下は、下位面形成期に古犀川の曲流浸食によって大きく湾入した地形を呈している。

この付近の主集落は、段丘面を覆う扇状地端または小溪流沿いに立地する。



第15図 遺跡の立地

第2章 地形形成史

1 松本盆地の形成

松本盆地東縁から上田盆地・長野盆地にかけて、標高800m～1,500mの山地が分布する。これは、更新世前期末(80～100万年前)に形成された隆起準平原で、この起伏面は大峰面群(小林・平林 1995、仁科 1972)と呼ばれている。

更新世中期初め(約60万年前)、大峰面群を切って松本盆地の陥没が始まり、盆地の形成する過程で長峰山は、標高700～850m内外に二段の緩傾斜地や肩状尾根を残した。上位面は長峰林道沿いのデーラボッチ付近で約40万年前、下位面は能念寺山・法音寺山など肩状尾根に分布し、中期後半約15万年前(松本盆地地研グループ 1972)と推定され、一連の河床礫層が分布する高位段丘である。

その後、高位段丘の堆積面を切って傾動隆起(長峰～光城山～上の山を通る南北方向の稜線を主分水嶺とし、山麓線から東へ2～2.5kmの幅で緩く東に傾動した隆起運動(山下ほか 1980))が起こり、盆地の相対的沈降によって長峰山地西斜面には、断層崖の三角末端面が南北に直線状の配列を生じた。

盆地は形態が整うにつれ、中山山地が北方からの隆起によって、高瀬川の流路は盆地を流れるようになり、盆地は奈良井川・梓川・高瀬川などの諸川によって、大規模扇状地の埋積が進み砂礫に覆われた。やがて古犀川は押野崎から犀川丘陵地に出口を求め、グレードに達して安定した。

盆地内部では、更新世中期の堆積物を覆って多量の砂礫(盆地中央では約360mの厚さ)が供給された。さらにアルプス側の急激な隆起によって盆地西側では、いくつかの扇状地が形成されていった。盆地南部や西部に広く発達している波田面(塩尻市から波田町にかけて盆地西南部に広く分布する堆積面)の最終形成期は、2.7万年前(松本盆地地研グループ 1977)と推定されている。その後、これらの堆積面は、一面に乗鞍岳の剣ヶ峰の火山灰に覆われた。更新世の終焉、一万年以前である。

2 光段丘面の形成

完新世に入って盆地の隆起が進み一面に扇状地端が削られ、次いで地盤の上昇は停止して砂礫の堆積が始まり、安曇野の主要部分を占める丸田段丘面(梓川村から三郷村・豊科町一帯)が形成された。丸田面の存分な堆積が終了すると梓川は、北進の流路を捨てて東進への河道を求め、直線的に東へ進むようになり、奈良井川と合流して東縁山麓を洗いながら北流の河道をとった。

一方東縁山麓では、南北に細長く山麓に張り付いて光段丘群が続く。この段丘群は岩石段丘で、最上位の標高約562mの野田面は、基盤岩の上を3m内外の河床礫層が覆っている。これは完新世初期の丸田層相当層の扇端が、この地域まで飛び地的に延びていたことを示すもので、その後押野崎-徳治郎西-平瀬西を結ぶ線を境にして間欠的な隆起または上昇の停止が繰り返されることによって、光段丘群は犀川の浸食を被り、下流にむかって階段状に北村面(上手屋敷面)や明科面を刻んでいった。

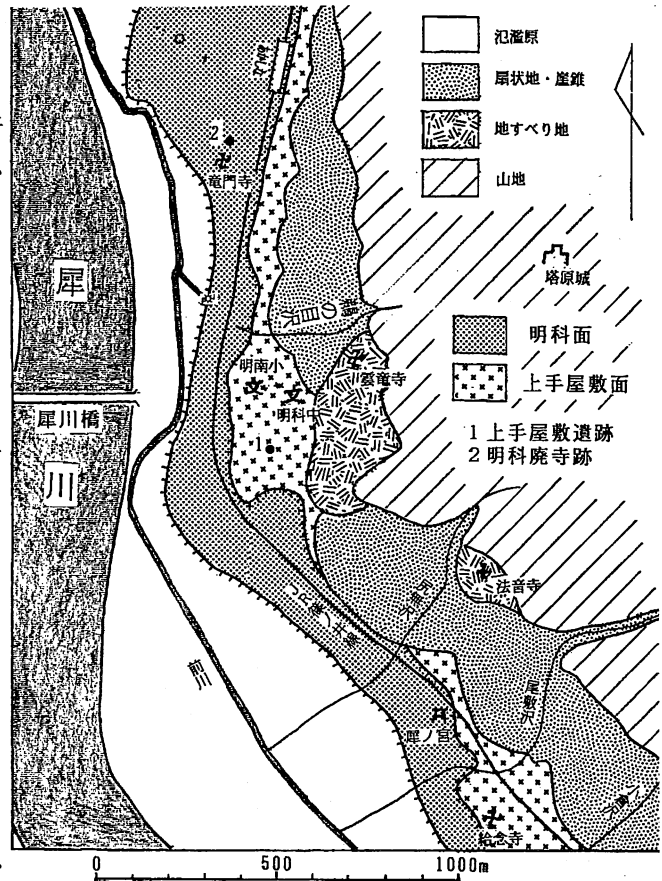
北村遺跡や上手屋敷遺跡の立地する一連の段丘面は、野田面の浸食が進んだ後、上昇の停止によって形成された段丘面である。

北村遺跡発掘の地質的所見(関 1989、1993)を通して、段丘面の離水期を縄文時代早期中頃と推定している。

3 犀川河道の変遷

やがて、東縁山麓に押しやられた犀川は蛇行を進め、熊倉川原田・野田白崖を初め浸食崖や段丘崖を刻み、犀の宮付近では大きく湾入して上手屋敷段丘の台地状地形を残し、明科廃寺の立地する下位に明科面を形成した。明科面の形成期は「明科町子どもと大人の交流センターひまわり」の発掘調査の折り、河床礫層直上の腐植物による炭素14年代測定では、「3000年前」を測られた。この面での遺構の発掘は古くて弥生時代中期以降であることから、妥当の年代と推定している。

そして歴史時代に入って東縁部では上昇期に転じて、特に堤防のなかった近世以前は犀川河道の変遷はおよびたく、徳治郎地域の西側や東側を交互に流れ、光地域から塔の原地域におよぶ明科面の浸食を進め、氾濫源を広げていった。



第16図 上手屋敷遺跡付近の地形

近世以降も、幾度か洪水に見舞われる。元禄11(1698)年の書上帳によると、寛文9(1669)年の大洪水に際して、徳治郎北の粟田口から瀬筋が中条・北村の崖下に向かい、その瀬筋が新川となった。下流の塔の原では、延宝2(1760)年の洪水で川筋が東へ寄ってしまい、宝暦10(1760)年堤防を作るにあたり、郡境(松本藩領と幕府領との境)が裁定された。

これに基づきそれ以後、当時の氾濫河道の境が、そのまま郡境や町村境に踏襲されて、現在の犀川河道西方の御宝田わさび園地籍に郡や町村の境界が所在する所以とされている。

第3章 地質

1 地質概観

松本盆地の西には、約2000mの標高差で中古生層の北アルプスが連なっている。一方、東側には標高差1000m内外の筑摩山地が広がる。

この両者を分ける境界線が糸魚川-静岡構造線である。この構造線より東側は、中生代末(6,500万年前)から第三紀中新世前期末(1,800万年前)にかけて生じた陥没地域に海侵して、海底に厚い地層を堆積したフォッサ・マグナ(大地溝帯)と呼ばれる地域である。

地層は、約1,600万年前~400万年前にかけて海に堆積した泥岩・砂岩・礫岩・凝灰岩などと、約500万年前~300万年前に噴出した火山岩類を含めた第三紀層、さらに約180万年前から現在までの間に、陸上で堆積した泥や砂礫・火山灰などの第四紀層から構成されている。

この地域に分布する地層は、第三紀中新統の別所層・青木層と一部鮮新統の大峰帯である。

段丘や氾濫源はこれらの地層を基盤岩として、凹凸面を2~10mほどの河床礫が覆い、その上面粘土層は砂層・細角礫層などが堆積し、扇状地地形や崖錘地形を形成している。

2 基盤岩

別所層

町内では最下位を占め、およそ1,500万年前~1,200万年前の地層である。奈良井川と梓川の合流地の犀乗沢付近から東は四賀村、北は長峰山地の西斜面を通り犀川に沿って生坂村に延びる。

岩相は、一般に静穏な堆積環境を示す緻密な黒色頁岩や泥岩からなる。所によって泥岩と砂岩の互層が挟まり、基盤の展張部にできる岩脈状砂岩も多数見られる。泥岩は剥離性に富んでいて、風化すると小塊片にくずれ易い特徴を持つ。そのため各地で岩肌を表わしたり、また小溪流の出口には扇状地の形成が目立つ。

地層の厚さは、東方の四賀村で最も厚く2,470mに達し、田沢付近で800m内外、北方の生坂村では150mほどと急速に薄くなって尖滅する。

青木層

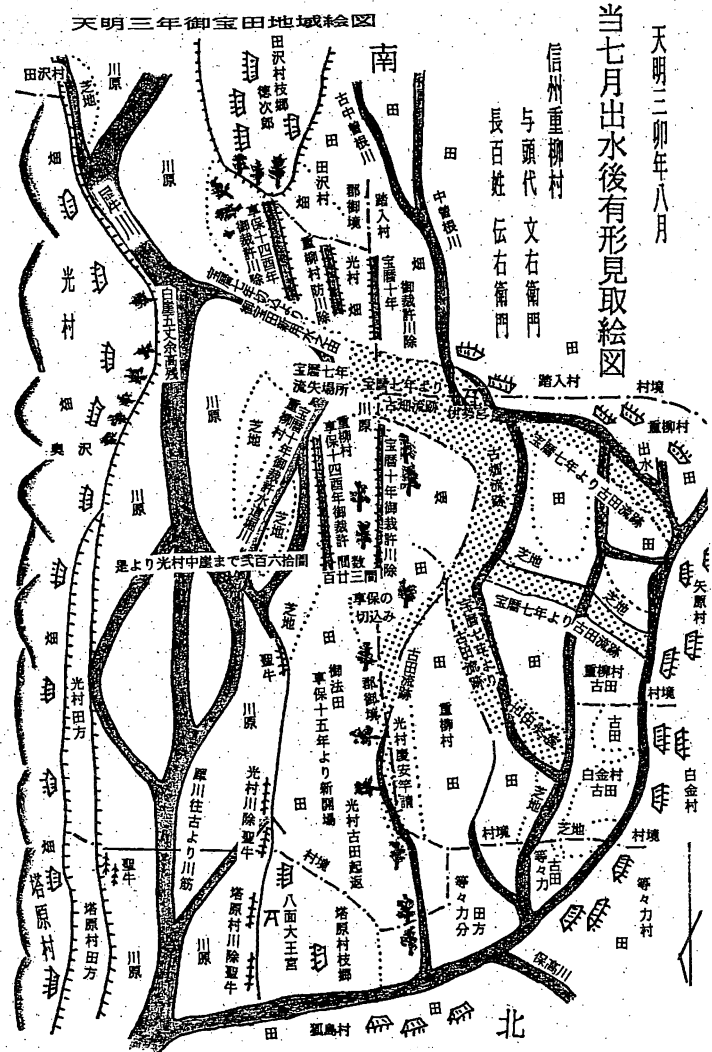
光白牧から長峰山の東斜面の清水、さらに潮沢川地域にかけて分布する。また犀川西方にも広がり、明科町の大部分を占める。およそ1,200万年前から900万年前の地層で、砂質泥岩・砂岩・礫岩などから構成され、最も一般的なものは砂質泥岩と砂岩の互層である。潮沢地域での層厚は、およそ1,800mを測る。

全般的に浅い海の堆積環境を示し、泥質部や互層部は灰褐色の砂質泥岩で、海底地すべりによる地層の変形が各所に見られ、スランプ構造など激しい基盤運動を物語っている。

この地層は、軟弱な岩質のため風化して崩れやすく、水に溶解してしばしば地すべりを発生させ、有数の地すべり地帯となっている。

大峰帯

押野崎から大穴山丘陵の中山断層以西に分布する。糸魚川-静岡構造線の活動によって形成された陥没性堆積盆地(小坂 1980)に堆積したもので、南限は光橋付近の犀川河床に沈む。



第17図 大王わさび園付近の洪水図

岩相は、頻海デルタ相またはデルタ相の凝灰質礫岩砂岩などで、流速の増減や急斜面から緩斜面へ移過した環境を示す。挟在する酸性凝灰岩の絶対年代は、およそ290万年前(加藤・佐藤 1981)である。中新統の青木層とは、中山断層で境する。

3 段丘

高位第一段丘

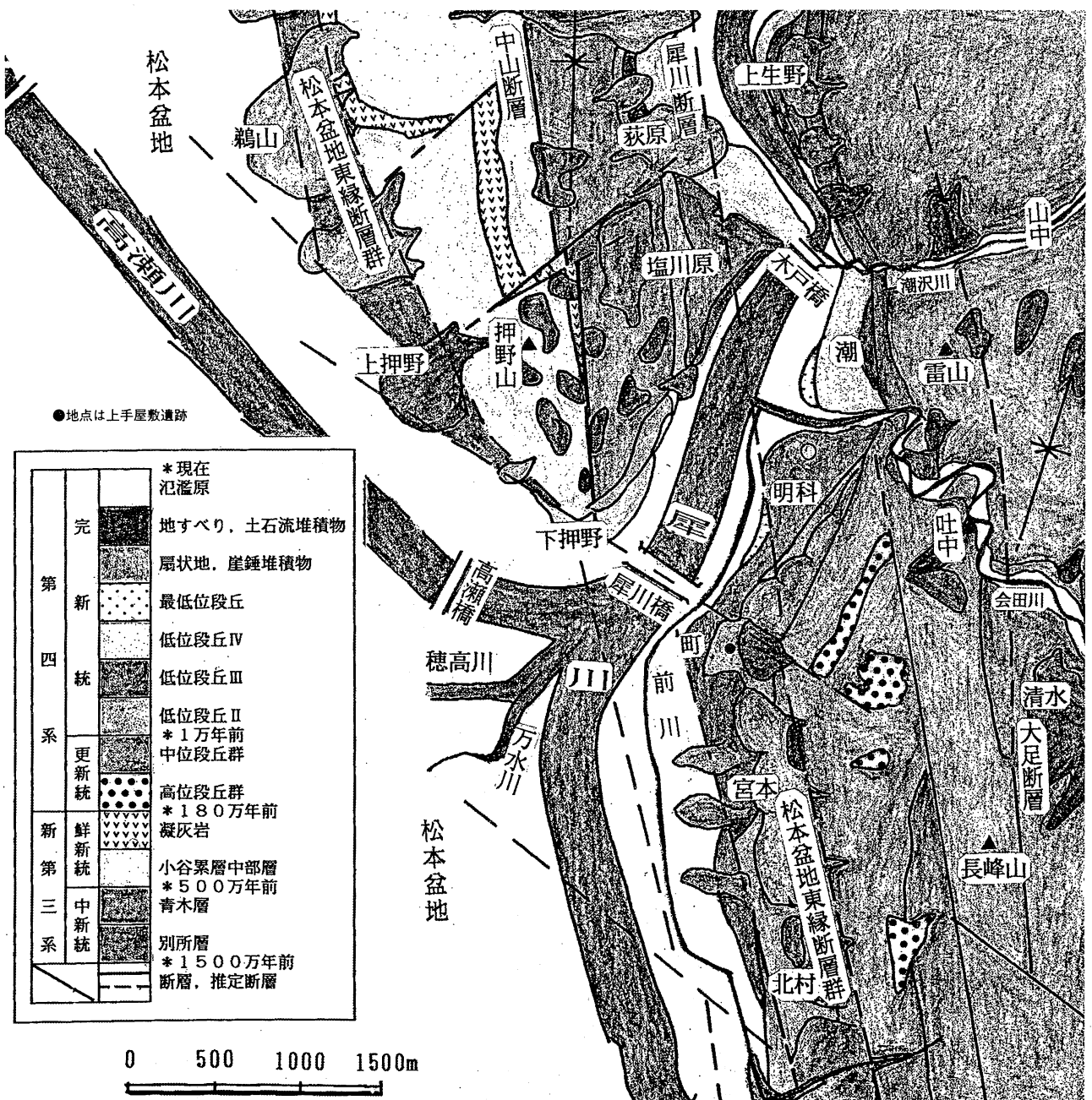
長峰山西斜面のデーラボッチなど、標高740~800mの山腹に緩傾斜地をつくる河床礫層である。層厚11m以上の亜円礫で、中粒砂が礫間を埋める。結晶火山灰は見られないが、風化して金色の黒雲母が存在することから梨ノ木層に対比され、およそ40万年前の形成と推定される。

高位第二段丘

能念寺山や法音寺山の山頂など標高700m内外に、肩状尾根や緩傾斜地をつくる河床礫層である。同層準に比定される四賀村反町の礫層では、白色軽石や金色に風化した黒雲母を含み、ローム層をのせることから片丘礫層(松本盆地団研グループ 1972)に対比され、およそ15万年前の形成と推定される。

中位第一段丘

長峰山西斜面は、中位段丘を欠く。この段丘は、犀川対岸下押野姥ヶ懐や三軒家など標高650m内外の緩傾斜地をつくる河床礫層である。中山山地の隆起によって高瀬川が、大穴山丘陵を横断した最末期の堆積物である。後期更新世前半の形成と推定される。



第18図 上手屋敷付近の地質図

中位第二段丘

下押野城ヶ平や塩川原上の平など、現在の犀川の曲流に関係なく分布する。標高は625m内外で、広い平坦地をつくる。基盤の第三紀層を削り、淘汰不良な亜円礫が層厚5mほど重なる。波田礫層(松本盆地団研グループ 1972)に対比され、後期更新世後半の4~3万年前の形成と推定される。

低位第一段丘

豊科町光野田地域に分布する、標高565m内外の平坦な岩石段丘である。奥沢扇状地の被覆を厚く受けて、分布は不明確である。3m内外の砂混じり亜円礫をのせている。完新世初期の形成と推定され、白崖では犀川の側侵を受けている。

低位第二段丘

光北村・塔の原上手屋敷および、犀川左岸の下押野やしき・上野・塩川原などに分布する。標高540m内外の平坦地で、山地の上昇の停止に伴い犀川が形成した岩石段丘である。基盤の第三紀層を削った凹凸面を、淘汰良好な厚さ2m程の円礫や砂が堆積する。一般的に扇状地に覆われる。縄文時代早期以降の形成と推定される。

低位第三段丘

豊科町光橋付近から天神原・塔の原町地籍・明科、犀川左岸のみどりヶ丘などに分布する。標高525m内外の岩石段丘である。三川合流地付近から犀川の曲流穿入によって、低位第二段丘を浸食してつくった岩石段丘で、4mほどの礫層に覆われる。形成期は縄文時代後期と推定される。

低位第四段丘

潮・荻原新井など下流域に分布する。標高520m内外の岩石段丘である。犀川の曲流に直接的に影響され、低位第三段丘を浸食して谷幅を狭めている。曲流の内側に位置する荻原新井や下流の上生野地籍などでは、砂泥質の堆積が目立つ。年代測定の資料を欠くが、形成期は縄文時代末以降と推定される。

最低位段丘

氾濫源直上の小規模な段丘である。明科・潮・荻原など一部の地域に分布する。資料を欠くので形成期は不明であるが、歴史時代以降の形成と推定される。

氾濫原

犀川・高瀬川および支流の現河床など、周辺の平坦地に発達する。川原の砂礫層の地域である。一般的に犀川右岸地域や犀川橋より下流域は、礫層の堆積が薄く、木戸橋付近からは河床に基盤岩が露出している。

押し出し堆積物

土石流堆積物、地すべり堆積物、扇状地堆積物、崖錘堆積物の地域を一括した。いずれも後背地の地質を反映しており、現在も堆積が進行している。

参考文献一覧

【考古編】

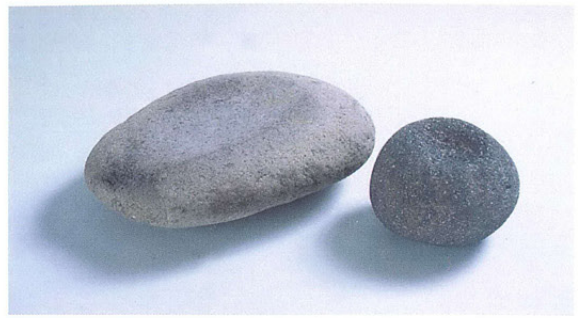
- 明科町教育委員会 1984 『明科町史 上巻』
明科町教育委員会 2002 『栄町遺跡』
太田圭郁 2000 「石器」 『平瀬遺跡2』 松本市教育委員会pp.93~122
松本市教育委員会 2003 『平田本郷遺跡4・5』
宮田村教育委員会 1990 『中越遺跡』

【地質編】

- 小口 高 1990 「松本盆地中部における活断層の垂直変移速度」 『断層研究』 No.3
小林国夫・平林照雄 1955 「松本盆地周辺の山砂利について」 『地質学雑誌』 61巻 712号
関 全寿 1984 「地形・地質」 『明科町史 上巻』 明科町教育委員会
関 全寿 1989 「松本盆地東縁河岸段丘に於ける埋積過程の一樣相-北村遺跡の発掘を通して-」 『田中邦教授退官記念論文集』
関 全寿・田中邦雄 1966 「松本盆地北方の第三紀層」 『信大教育学部研究論集』 No.18
仁科良夫 1972 「大峰面の形成過程」 『地質学論集』 No.7
仁科良夫 1983 「松本盆地の陥没過程」 『地球科学』 37号
松本盆地団研グループ 1972 「松本盆地の第四紀地質の概観」 『地質学論集』 No.7
山下昇ほか 1980 「松本盆地東縁、明科~田沢間の山麓の地質と地形」 『専報 24島弧変』 No.2



出土石器(その1)



出土石器(その2)



接合復元土器(その1)



接合復元土器(その2)

写真2 遺物

報告書抄録

ふりがな	わでやしきいせきだいにじちようさ							
書名	上手屋敷遺跡第2次調査							
副書名	町営住宅建設に伴う緊急発掘調査							
巻次								
シリーズ名	明科町の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第12集							
著者名	堀久士・関全寿・島田哲男							
編集機関	明科町教育委員会							
所在地	〒399-7102 長野県東筑摩郡明科町大字中川手6824-1 電話(0263)62-3001							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
わでやしきいせき 上手屋敷遺跡	ながのけんひがしちくまぐん 長野県東筑摩郡 あかしなまちなかがわて 明科町大字中川手	20241	404	36° 20' 36"	137° 55' 39"	2003.10.07より 2003.10.31まで	422m ²	町営住宅建設による
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上手屋敷遺跡	集落址	縄文時代前期 古代 中世	竪穴式住居址5軒 溝址2条 土坑	縄文土器 土師器・須恵器 鏃形石器	縄文時代前期の集落址と古代・中世の複 合遺跡。柱痕のある土坑群と調査区北西 の溝址については今後の調査に期待。			

明科町の文化財 第12集

上手屋敷遺跡第2次調査

・町営住宅建設に伴う緊急発掘調査・

平成16年3月31日発行

編集・発行 明科町教育委員会

長野県東筑摩郡明科町大字中川手6824-1

